



舟運の町から陸運の要へと変遷

今では「十川」といえば十川の街を指すが、そもそも「十川」は、井崎、弘瀬(広瀬)、川口、大野、戸川、烏(古城)、地芳(地吉)の七村を指す村名であった。現在の十川の街は七村の中の「大野」にあたる。明治に入ると七村はそれぞれ独立村となるが、明治22年の町村制施行で再び合併し十川村となる。それから68年後の昭和32年、十川村と昭和村が合併し十和村が誕生。この時に「大野」は「十川」と改称された。

四万十川沿いに位置する十川は、古くから舟運の町であったが、トラック輸送の発達と共に県道や国道が整備され、十川は周辺集落の産物を出荷する陸運の拠点として栄えていった。

にぎわった二つの映画館

大野から十川へと改称されてからも「首都」としてのにぎわいは続いた。街には映画館が2カ所あり、そのうちの一つ「南座」は、大きな蔵を再利用したところだった。当時、昭和の街にも映画館があり、同じ映画を時間差で上映することもしばしば。その時には、フィルム交換のためにバイクを走らせた。ある時青年

団の有志が「こんな田舎だからこそ、村の人たちに洋画を見せてあげようじゃないか!」と話し合い、初めての洋画上映を企画した。フィルムの費用は入場料で賄えるという算段であったが大失敗!「田舎では洋画の人气がなくてね～。大赤字じゃった!」と「当時の若者」が懐かしそうに語ってくれた。

街西端に迫り出していた山のこと

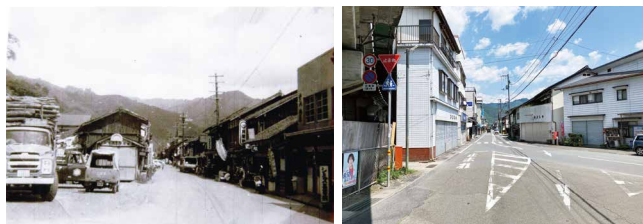
産土神は新田天満宮(天満天神)で、今は星神社に「間借りさせてもらっている」というが、元々は街の西端の小山の上にあったらしい。商店街の西端にある雑貨店の、国道を挟んだ向かい側は70年ほど前までは山だったという。この山を削って宅地にするという事業が行われたのだが、作業は全て手作業(手掘り)であった。小・中学校校庭の整備拡張に使われた。現在の十川小・中学校のグラウンドの土は、その時のものである。

また、街の西端にバス停があるのだが、昔はここに茶堂があった。ここから長沢川の河原に下りて行く。四万十川との合流地点に近いこの一帯は縄文時代の土器などが多数出土した「十川駄馬崎遺跡」である。

町のうごき

(7月31日)	人	口	前月比	出生	死亡	転入	転出
男	7,274	-8		男 3	15	17	13
女	7,831	-22		女 3	17	13	21
計	15,105	-30		計 6	32	30	34
世帯数	8,008	-11		(7月中の届出)			

窪川地域 10,766人 大正地域 2,071人 十和地域 2,268人



十川今昔(昭和30年頃と現在)